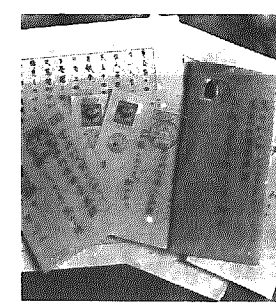


街

か
ど

「街かど」は皆さんのページです。皆さんの投稿は必ず掲載します。スペースの都合で一部省略する場合があります。募集するものは町に対する意見、要望や、短歌、俳句、川柳、詩、絵画、イラスト、写真などの作品、その他です。●文字を書くのはどうも苦手、というかたは電話してください。取材に伺います。●氏名などを公表したくないかたは匿名にしますが、編集部へは氏名、住所を知らせてください。●投稿・連絡先 黒崎町大野二八四三―一 黒崎町役場企画課 広報くろさき「街かど」係 ☎七三三〇一



漢詩

題 緒立 (緒立に題して)

板井四 萩野 覚心

- 一、伝千紀緒立之山
- 二、森器社殿復莊殿
- 三、円墳土器忍古昔
- 四、炎夏人求涼宮参
- 五、老黒崎莊憩鉢泉
- 六、町立民具史料館
- 七、境内有忠霊之碑
- 八、更鷲尾翁胸像観

- 一、緒立の山は千年の昔を今に伝えている
- 二、八幡宮は莊殿で立派なお宮である。
- 三、円墳や土器は遠い昔を想い忍ばせるものがある。
- 四、あつい真夏には涼しさを求めてお参りする人が多い。
- 五、老人は黒崎莊の鉢泉で一日を憩う。
- 六、町は民具史料館を建ててある。
- 七、境内には乃木大将の筆になる忠霊の碑がある。
- 八、さらに高徳の人鷲尾精治翁の胸像を見ることが出来る。

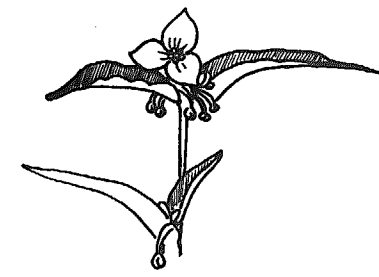
随筆

廃品回収で賄う八区寿会

大野八区 広川 一栄

大野の八区寿会は昭和四十四年三月に設立された。現在まで六代の会長を数え、会員数は七十二名で、この三月に設立十六年がたった。役員は任期は二か年であるが、再任は妨げないかと会則にある。選任された各役員にはそれぞれ責任が分担され、クラブ活動や決定事項は事業係を主体として、会長は理事会を招集しその内容を審議することになっている。審議は願

間には報告される。さて大切なことは会の経費運営方針である。ほかのクラブもだいたい収入源は同じと思うが、会員の年会費、補助金、寄付金、簡易保険の手数料などで賄っていると思う。八区寿会では昭和五十三年以来、廃品回収をして収入を得ている。目的は会の財政を豊かにするためである。得た収入は会員のためになるよう配慮され、毎年行われる事業



これらは廃品回収の収入があってできるのである。この六年間、廃品回収ができたのは

町内の協力と歴代役員汗の結晶である。会計が豊かであれば、ボウ

随筆

牡丹によせあれこれ (その八)

焼酎団地 青木 和夫

幽王は大いに喜んだ。比類のない美しき、この世のものとは思えない気品、深い愁をたたえたこの娘に幽王の心ははやった。早速宮殿を新築し、第二夫人の地位を与え溺愛した。これが褒姒は笑わ

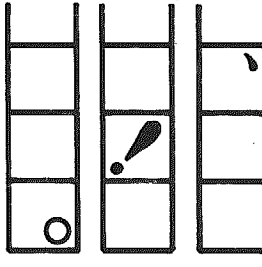
ぬけの殻であった。褒姒にせがまれるまま、物見櫓にのぼっては、のろしと太鼓を使いあわてふためいて駆けつける武侯たちや従者を見て喜びあっていた。しまいに、いくらのろしを掲げ太鼓をたたいても誰れ一人として集まらなくなってしまった。そして、「申候(幽王の后となつた娘の父親、癡后となつて以来幽王を怨んでいた)と手を組んだ犬戎が都に攻め寄せてきた。幽王は狂気のようになつて、のろしを掲げ太鼓をたたかしたが無駄であつた。一人の武侯も都に来てくれなかつた。

幽王は「我が王者の愛すら褒姒には通じないのかと思わずにはいられなかつた。日々疎ましくなつていく政務、笑わない褒姒、幽王の憂愁は日増しに濃くなつていった。ある日、臣下の一人が「狼火台に狼火を掲げて、物見櫓からその有様を褒姒さまにお見せしたら、お笑いになるかも知れません」と進言をした。早速幽王は、褒姒の手をとつて物見櫓に登つた。そして諫止する臣下の手を払いのけのろしを掲げ太鼓を打ち鳴らさせたのである。さあ大変!

狂つたように笑いこける褒姒を満足げに眺めた幽王は、ようやく日ごろの憂愁が解けて行くような気がしたのである。しかし、納まらぬのは武侯達である。「我等の忠誠心も褒姒の一笑に値しないのか」と、やがてだれ言うことなく「周室の滅亡も近い」と帰路につく武侯達の間、ささやかれるようになった。それからの幽王は、全くも

今月の投稿

今月も投稿を頂きありがとうございます。俳句、随筆が多いのですが、町への要望などもあればお寄せください。それから、文字はできるだけわかりやすく書いてください。編集や印刷のときに間違ふ可能性が高いからです。電話番号もお忘れなく。



短歌

紫の雪ひだ見つつ遅々として進まぬバスに時計いくたび
かづ女
夫なればいさかい事も又解けてほころぶ顔にまのわき見ゆ
宇田 ミイ
ニューリップ持ち来し友の嬉しくて時を忘れて炬燵に語ろう
金内 セツ
雪の中早朝出て行く娘のために時間をかけてのっぺい汁煮る
泉井 ヨ子
雪かきで葱掘りおれば目さとも土恋うらんか鶴鶴の来つ
平松清次郎
数多く太き雷をつげながら大雪に折れし山茶花いたまし
柏 直樹地
雪原に朝日のさせる立春を地吹雪舞いて行手ささぎる
小出美喜子
高熱の我背負いくれし伯父は今病に臥して点滴を受く
阿部 浄子

俳句

あけはなる生命の讃歌初御空
青木 和夫
雪の市並べし蟹の動きけり
海津みよき
深雪に青葉の姿今いづこ
田辺 正二
層層重積雪のあとそのままに
寒の入り主婦業すぐに始動せず
かづ女

◎連載③ My way



四十歳、大野五区。45年から町の統計調査員として活躍。県統計協会総裁表彰を受賞。

「十五年やって、たまたま頂いたという事です」 岩尾 俊一郎

国勢調査三回、事業所統計調査五回、工業統計調査七回、商業統計調査五回、労働力調査三回、合計二十三回。これがこのほど新潟県統計協会総裁表彰を受けた岩尾俊一郎さんの統計歴である。「みんないろいろな仕事をしているわけですが、少しは地域のためになると思つて始めたのですが、こんなに長く続けるとは思いませんでした」 昭和四十五年から十四年間、黒崎町の統計調査員として活躍してきた。調査員の手当ては少ない。「統計調査でむずかしいのはいくつもあります。一つは必ず約束を守らなければならぬということ。雨でも雪でも調査に行くと言つた以上は行かなければなりませんからね。中には何回も何回も行かないと納得